

上尾市立平方幼稚園 研究の歩み



令和4年3月
上尾市教育委員会

研究の歩み刊行に寄せて

上尾市教育委員会
教育長 池野 和己



このたび、上尾市立平方幼稚園が開園57年目を迎えられ、これまで実践してこられました研究などを改めてまとめ直し、「平方幼稚園研究の歩み」を刊行されますことは、誠に意義深く、心から敬意を表します。

本園は、昭和40年4月に、地域住民の皆様から強い要望を受け、平方小学校の校舎の一部を仮園舎とし、開園いたしました。昭和50年代初めには、上尾市の人口増加に伴い、在籍園児が200名以上に達しておりました。これまで、地域に愛される幼稚園として、卒園生及び保護者・地域の皆様に支えていただきながら、歴代の園長先生のもと、教職員の皆様の御努力で歩み続けてこられたものと認識しております。

さて、平成30年4月に幼稚園教育要領が改正され、「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」が示されました。さらに、令和3年7月に中央教育審議会教育課程部会において「幼児教育スタートプラン」が策定され、幼児教育を取り巻く環境は、大きな変革を迎えようとしております。

そのような中、本園におかれましては、これまでに取り組みされた埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会の委嘱研究や園内研究を振り返り、研究の成果について改めてまとめ直されました。積み重ねた実践の中で共通しているのは、「幼児の姿」を中心に据えて教育を行うという教師の姿勢です。これは、新しい時代においても変わらず大切にすべき事柄です。常に「幼稚園教育要領」を踏まえ、目の前にいる子供たちの笑顔のために取り組んでこられた研究の成果は、本市の幼児教育の充実に寄与するものでございます。

結びに、これまで御指導を賜りました指導者の方々、御支援いただいた保護者・地域の皆様に厚くお礼申し上げます。また、歴代の園長先生をはじめ、教職員の皆様の熱心な研究への取組に対し感謝を申し上げますとともに、本市の幼児教育の推進の一助となりますことを祈念し、挨拶いたします。

園長挨拶

上尾市立平方幼稚園 園長 田中栄次郎

平方幼稚園は、令和3年度、開園57年目を迎えた歴史と伝統のある公立幼稚園です。昭和40年に平方小学校の校舎の一部を仮園舎として開園し、以来、上尾市当局や市議会の皆様、教育委員会、市内各幼稚園、保護者並びに地域の皆様方に支えていただきながら、これまで歩み続けてまいりました。

本園は、市内唯一の公立幼稚園として、常に「幼稚園教育要領」を踏まえた幼児教育の実践に尽力してまいりました。子供たちの笑顔のために、埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会からの研究委嘱をいただいたり、園内研究を推進したりしながら、時代のニーズに応じた幼児教育に取り組む中で、遊びや生活経験の中のいろいろな体験を通して、教育目標である「明るく元気な子・豊かな心の子・進んでやる子」を育てまいりました。

この度、本園での実践を振り返る機会をいただき、改めて57年の歩みをまとめ報告させていただきます。この報告内容が、今後の上尾市の幼児教育の一助となれば幸いです。

結びに、2570名の卒園生、本園を愛し、これまでの活動にご理解・ご協力いただきましたすべての皆様に改めて感謝申し上げ、挨拶といたします。

目 次

1	沿革の概要	1
2	歴代園長	3
3	園児数の推移	4
4	教育計画	5
5	指導の重点・努力点	6
6	日課表	6
7	主な年間行事予定	6
8	教育実践の歩み	
(1)	委嘱研究	
ア	研究委嘱（平成8・9年度上尾市教育委員会）	7
イ	研究委嘱（平成11年度上尾市教育委員会）	10
ウ	研究委嘱（平成12・13年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）	15
エ	研究委嘱（平成18・19年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）	17
オ	平成24年度親支援モデル施設育成事業（埼玉県指定）	20
(2)	園内研究	
ア	平成27年度	22
イ	平成28年度	23
ウ	平成29年度	24
エ	平成30年度	25
オ	令和元年度	26
カ	令和2年度	27
キ	令和3年度	28
9	まとめ	30

別冊資料（資料1～資料28）



1 沿革の概要

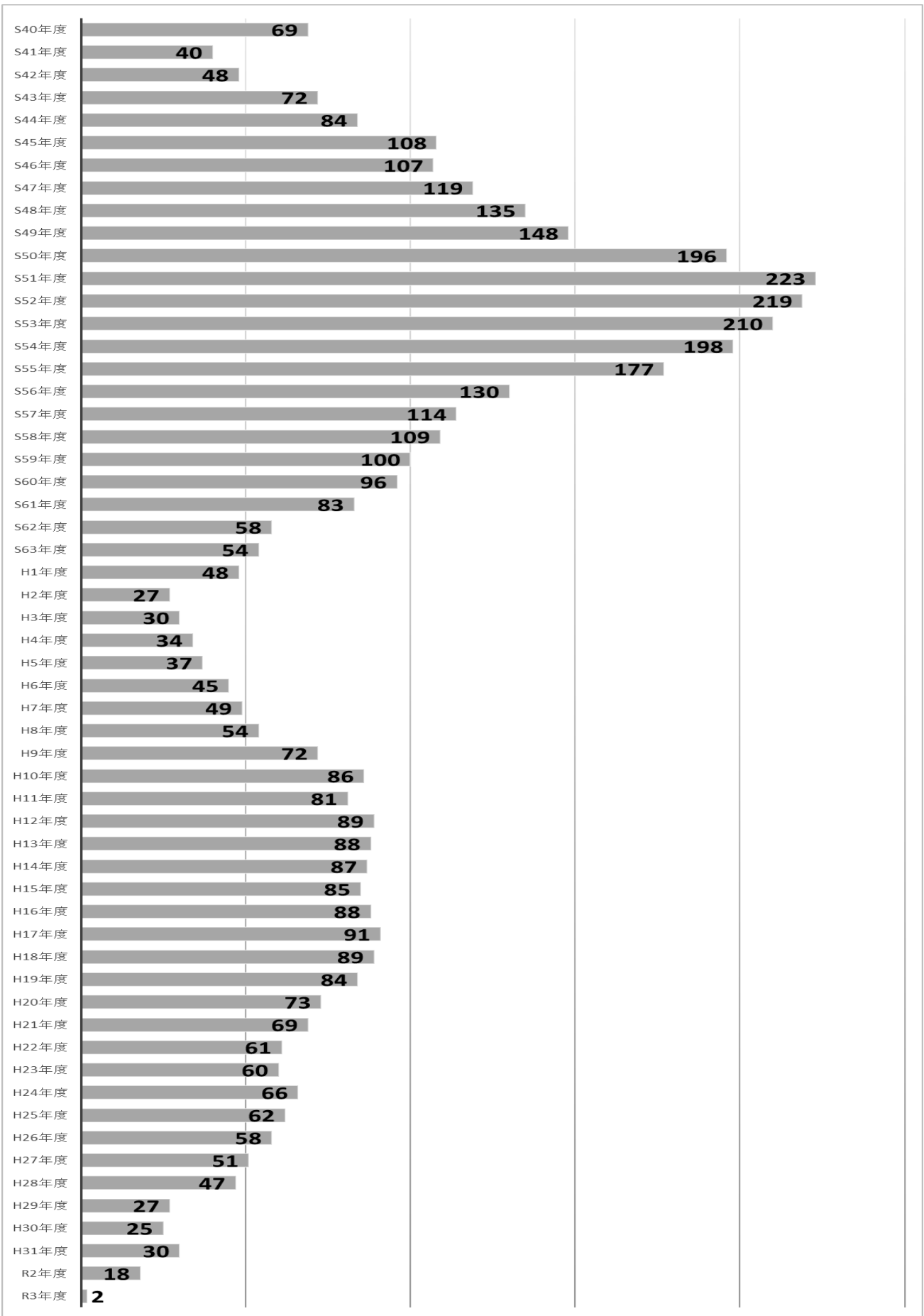
- 昭和 40. 4. 1 平方地区民の希望で、上尾市立平方小学校内に校舎を仮園舎として、平方幼稚園が設立される。
4. 13 平方幼稚園開園式典挙行
- 昭和 43. 4. 1 2年保育を新設
- 昭和 49. 7. 1 研究委嘱（昭和49・50年度埼玉県教育委員会）
- 昭和 50. 4. 1 後援会発足
11. 6 創立10周年記念式典挙行 園旗制定
- 昭和 52. 9. 1 小学校増築のため園庭縮小、下校庭を仮園庭として使用、遊具移動
- 昭和 54. 8. 28 北足立北部地区同和教育実践報告発表
11. 22 造形教育関東ブロック大会提案発表
- 昭和 59. 7. 16 木造園舎解体
8. 23 北足立北部地区同和教育実践報告発表
9. 1 新園舎完成
- 昭和 60. 3. 2 創立20周年記念式典挙行
4. 1 幼稚園・家庭との連携研究協力委嘱（昭和60・61年度埼玉県教育委員会）
- 平成元. 5. 1 幼児教育研究委嘱（平成元・2年度上尾市教育委員会）
11. 22 上尾市教育委員会委嘱幼稚園教育研究発表
- 平成 2. 10. 17 幼稚園指導者研修会現地研修会場
11. 9 小・中学校初任者施設体験研修会場（平成2年から平成10年まで）
- 平成 3. 3. 30 幼児教育研究紀要発行
5. 22 調査研究協力園委嘱（平成3・4年度県立南教育センター）
8. 2 北足立北部地区同和教育実践報告発表
- 平成 6. 4. 16 創立30周年記念式典挙行・記念誌発行
- 平成 8. 5. 10 幼児教育研究委嘱（平成8・9年度上尾市教育委員会）
6. 12 プール新設
8. 7 埼玉県放送教育夏季研究大会提案発表
12. 2 幼児教育研究委嘱（平成8・9年度上尾市教育委員会）研究発表
- 平成 10. 6. 15 園庭改修工事・遊具移動
- 平成 11. 4. 3 遊具（キリンランド）設置
4. 12 砂場新設
5. 12 研究委嘱（平成11年度上尾市教育委員会）
11. 12 埼玉県教育メディア活用研究大会公開園
- 平成 12. 4. 12 研究委嘱（平成12・13年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）
- 平成 13. 5. 26 テラス屋根改修工事

- 10.3 研究委嘱（平成12・13年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）
研究発表
- 平成14. 2.21 門扉・フェンス改修工事
7.5 栽培園設置
- 平成15. 3.18 ホール緞帳取り付け
6.4 ブランコ・鉄棒・シーソーの遊具設置
7.1 ホール及びりす組前に手洗い場新設
- 平成16. 3.16 ホールにトイレ新設
- 平成17. 3.17 トイレ入口改修工事及び木絵壁画設置工事
7.25 東側園舎外壁塗装工事
- 平成18. 4.26 幼・保と小学校の連携推進事業研究指定（平成18・19年度埼玉県
教育委員会）
7.25 防犯カメラセンサー設置
9.13 テラス前人工芝設置
- 平成19. 6.25 園児通用門新設（東側）
- 平成20. 2.7 幼・保と小学校の連携推進事業研究指定（平成18・19年度埼玉県
教育委員会）研究発表大会（平方小学校において）
8.29 モニュメント時計設置
- 平成21. 9.24 プール側花壇設置
- 平成22. 3.31 くま組手洗い場設置
- 平成23. 3.15 レリーフ動物2体フェンスに設置
6.21 保育室エアコン設置工事
- 平成24. 7.27 二人乗りブランコ設置
- 平成25. 2.1 埼玉県指定「親支援モデル施設育成事業研究発表会」
6.11 プール改修工事
7.8 上尾市接続期プログラム「アプローチカリキュラム」作成協力
7.23 りす組天井張替工事
- 平成26. 7.2 創立50周年記念事業
大型遊具「レトロな汽車デラックス」お披露目式
- 平成27. 10.23 創立50周年記念式典挙行・記念誌発行
- 平成29. 2.1 ホールに木絵時計設置
- 平成30. 3.29 テラスの柱塗装完了
- 令和2. 3.27 会議室前よしず張替工事
10.15 新入園児募集停止

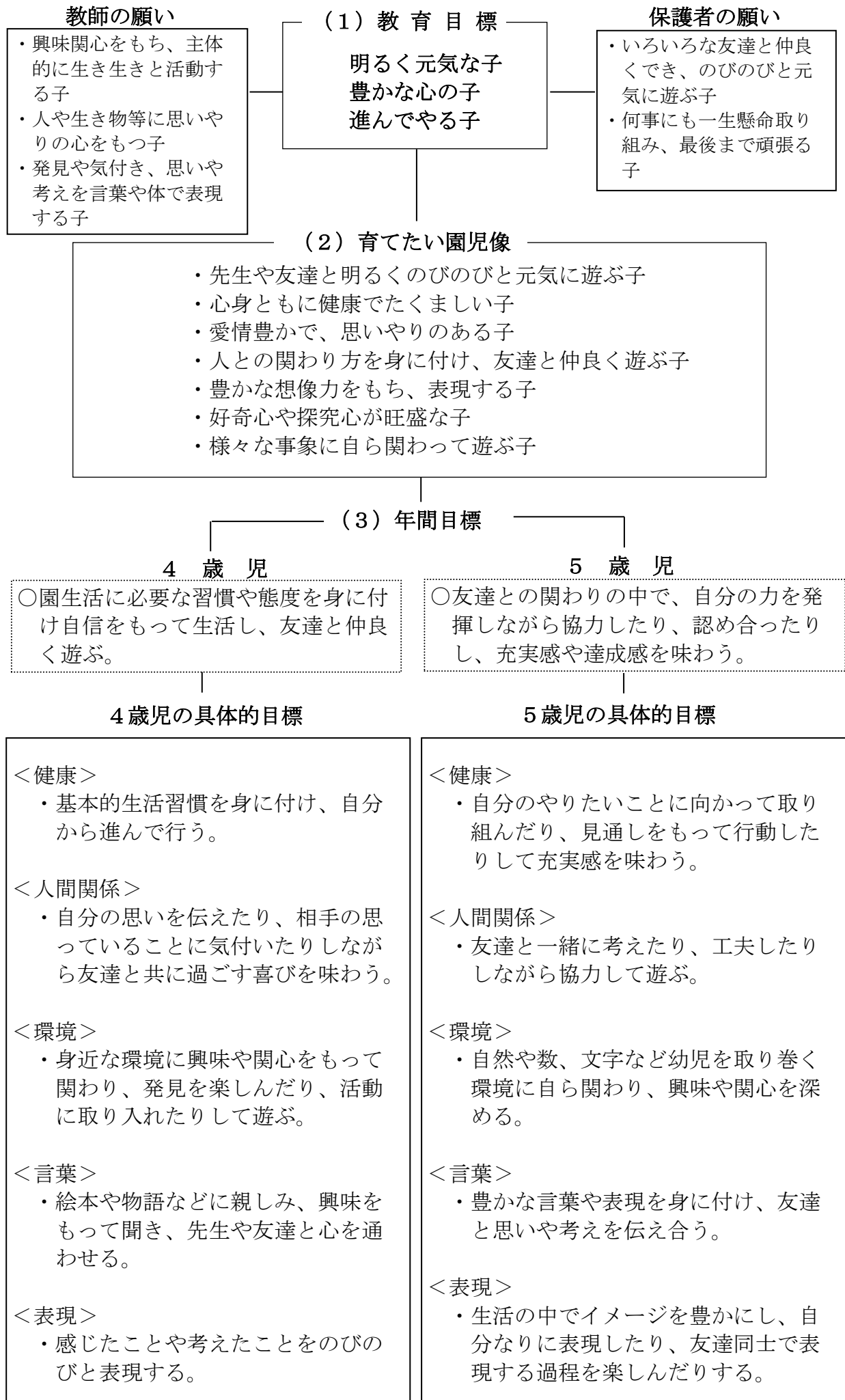
2 歴代園長

代	園長名	在職期間
初代	秋庭 栄	昭和 40 年 4 月 1 日～昭和 42 年 3 月 31 日
2 代	甘楽 正義	昭和 42 年 4 月 1 日～昭和 45 年 3 月 31 日
3 代	石井菊太郎	昭和 45 年 4 月 1 日～昭和 50 年 3 月 31 日
4 代	田島 達郎	昭和 50 年 4 月 1 日～昭和 52 年 3 月 31 日
5 代	石川 光治	昭和 52 年 4 月 1 日～昭和 54 年 3 月 31 日
6 代	植竹 良男	昭和 54 年 4 月 1 日～昭和 57 年 3 月 31 日
7 代	新木 義治	昭和 57 年 4 月 1 日～昭和 59 年 3 月 31 日
8 代	清水 正己	昭和 59 年 4 月 1 日～昭和 62 年 3 月 31 日
9 代	島村長五郎	昭和 62 年 4 月 1 日～平成元年 3 月 31 日
10 代	新井 一雄	平成元年 4 月 1 日～平成 4 年 3 月 31 日
11 代	岡田廣太郎	平成 4 年 4 月 1 日～平成 7 年 3 月 31 日
12 代	河内 正己	平成 7 年 4 月 1 日～平成 9 年 3 月 31 日
13 代	小川 哲男	平成 9 年 4 月 1 日～平成 13 年 3 月 31 日
14 代	岩城平七郎	平成 13 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 13 日
15 代	吉田るみ子	平成 16 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
16 代	坂巻 政美	平成 20 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
17 代	土屋 馨	平成 24 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日
18 代	深谷 桂治	平成 28 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日
19 代	升屋 好永	平成 31 年 4 月 1 日～令和 3 年 3 月 31 日
20 代	田中栄次郎	令和 3 年 4 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日

3 園児数の推移



4 教育計画（令和2年度参考）



5 指導の重点・努力点（令和2年度参考）

- (1) 幼児が充実感や満足感を味わえるような環境構成や援助の工夫を行う。
- (2) 各発達段階に応じた、あるいは異年齢クラスに応じた幼児の協同性を育むための指導計画と実践を行う。
- (3) 異年齢の関わりを意識した活動を展開し、互いに育ち合う工夫をする。
- (4) 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿（10の姿）を意識した見通しある活動を展開する。
- (5) 小学校以降の生活や学習の基盤になるように、幼児期から好奇心や探求心をもち、問題を見出したり、解決したりするような力を育てていく。
- (6) 幼児自らが整理整頓できる環境を整え、物を大切に作る心を育てる。
- (7) 学期ごとに保護者から簡単な幼児の到達度を確認し、次の指導に生かしていく。

6 日課表

曜日 \ 時間	8:50	9:00	11:40	12:40	14:00 (14:30)
通常保育 (月～金)	登園	保育	昼食	保育	降園
午前保育	登園	保育	11:30 (12:00) 降園	※午前保育は、行事 誕生会 等の場合	

※()は年長の時間

7 主な年間行事予定

月	行事	月	行事
4	進級式 入園式 発育測定	10	運動会 おいもほり 幼・保交流会
5	離任式 尿検査 内科検診 誕生会 上尾市一斉避難訓練 親子遠足	11	幼稚園公開日 観劇会 焼き芋会 親子・地域ふれあいの日 誕生会
6	歯科健診 土曜参観 プール開き 園外保育（丸山公園）	12	おもちつき お楽しみ会 終業式 冬季休業
7	カレーパーティー 誕生会 終業式 夏季休業 夏季保育（年長組小学校プール体験）	1	冬季休業 始業式 発育測定 昔遊び交流 誕生会
8	夏季休業	2	学校・給食体験 豆まき 生活発表会 誕生会
9	始業式 発育測定 誕生会 平方地区敬老会参加 サッカー教室 園外保育（丸山公園）	3	お別れ会 修了証書授与式 年少組修了式 学年末休業

8 教育実践の歩み

(1) 委嘱研究

ア 研究委嘱（平成8・9年度上尾市教育委員会）

(ア) 研究主題

豊かな心を育む環境を考える

～身近な環境に関わって生き生きと生活する幼児の姿を通して～

(イ) 研究の概要

a 主題の設定の理由

幼児期は、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して心情、意欲、態度が培われる時期である。

このようなことから教師は、幼児が興味・関心をもって周りの環境と関わり、発達に必要な体験を得られるような教育環境を作り出し、その環境の中で遊びを通して、心身ともに健康な幼児を育てることが大切である。

今日、子供達を取り巻く環境は物があふれ、欲しい物は何でも手に入る時代である。家庭内の遊びもテレビ、ファミコン、ビデオ等の受け身的な遊びが中心であり、また核家族化、少子化傾向によって、兄弟、友達との交流や子供同士で遊ぶ機会が少ない等、質的变化により、人間関係が希薄になってきていると言われている。

そこで、幼稚園生活の中で教師や友達等、人との関わりを深めながら、感動する心や楽しさ、悔しさ、思いやり等の様々な体験をすることで、生きる力の基礎となる豊かな心や、意欲、態度が、遊びを通して一人一人の幼児の内面に育ち、心身の調和のとれた発達が培えるように、この主題を設定し、研究を進めることにした。

b 研究主題の受け止め

豊かな心とは大きく漠然とした言葉であるが、幼児期の育ちから考えると美しいものを見て美しいと感じたり、楽しい時、悲しい時、嬉しい時等の喜怒哀楽を素直に表現したりする子や思いやりの心やぬくもりをもてる子ではないかと捉える。

(a) 幼児が素直に表現できる心を育てるには

- ①幼児が自分の思いを表現できる雰囲気があること。つまり、教師との信頼関係や他の幼児との仲間意識がしっかりしていること。
- ②教師に認めてもらう、褒めてもらう等の経験をたくさんもつこと。
- ③教師や友達と十分に関わる経験や心を揺さぶられるような感動体験をたくさん行わせること。
- ④いろいろな遊びを通して達成感、挫折感、葛藤、充実感等を繰り返し体験する中で自分を知ることや、友達の考えや存在に気付いていきながら、心身の調和のとれた発達をしていくこと。
- ⑤何でも受け入れ吸収していく多感な時期に、教師が一人一人の幼児の感じ方や気付きを受け止め、さらに、心の動きを汲み取り関わること。

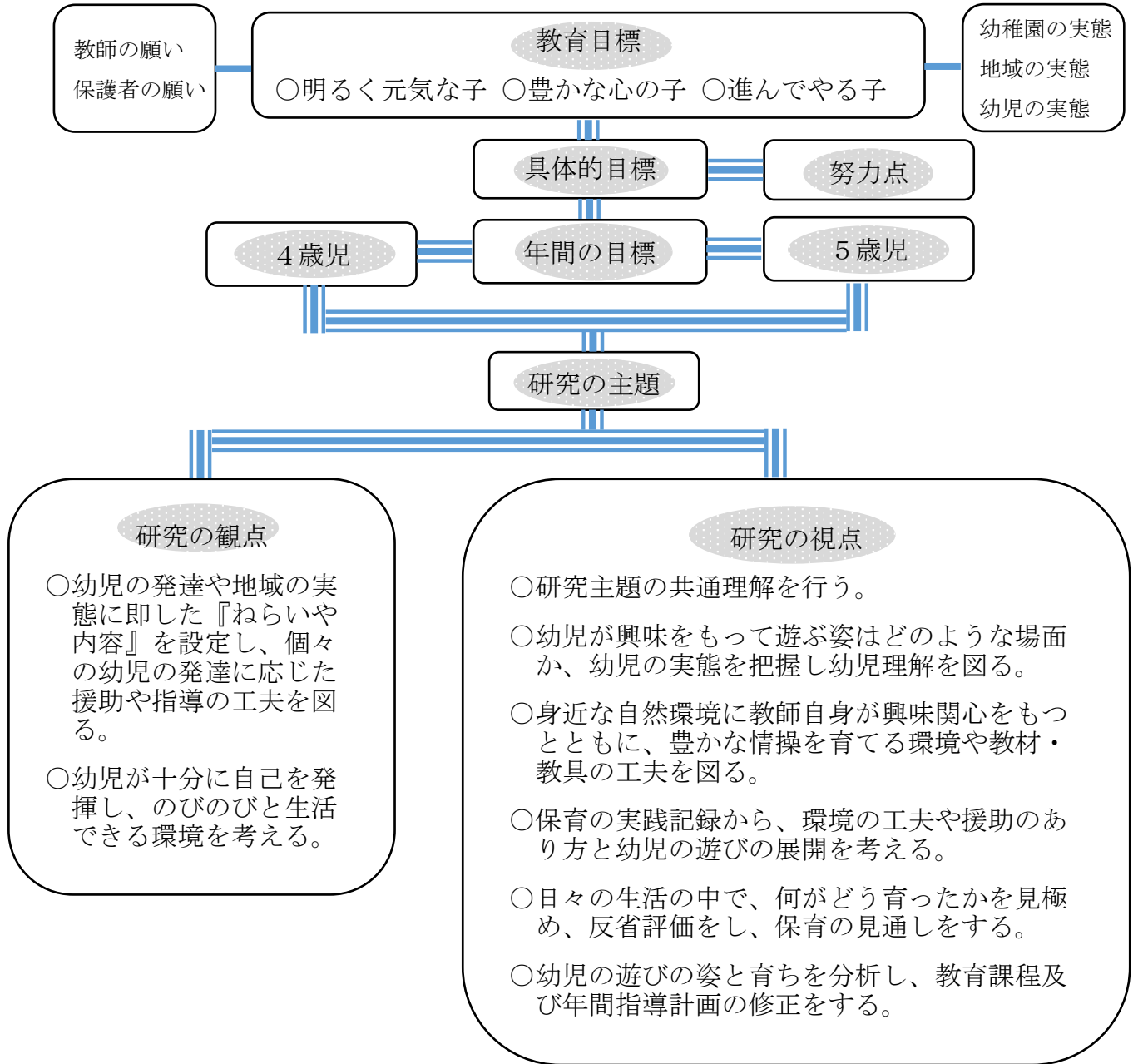
(b) 思いやりの心を育てるには

思いやりとは、相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む能力であると捉える。つまり、自分の行動が相手にとって困るのではないかと考え、その行動を我慢する自己統制が育つことである。そこで、思いやりのある子を育てるためには、幼児の自発性を育てることが重要である。自発性が順調に育てば、意欲が盛んになり創造性も発達する。そして、思いやりと意欲が基盤になって社会性が芽生え、友達との向き合い

も盛んになると考える。

このようなことから、教師は、幼児が生活している背景を考え、幼児理解を図り、幼児の興味や関心に基づいた環境を構成し、その環境の中で友達や教師との関わりを深めながら充実感を味わえる園生活にしていくことが大切である。また、十分に遊びに取り組める時間と場、用具や素材を用意するとともに、一人一人が満足のいく遊びをしているか、幼児の遊ぶ姿から内面を捉え、個々の幼児の発達に応じた援助や工夫をしていくことが重要であると考え。

c 研究の全体構想



d 具体的な取組

(a) 4歳児

事例1 「T男の姿をおって」－日々の保育の記録から－ **資料1**

事例2 「積み木遊びを通して」－友達との関わりができてきた頃の事例－ **資料2**

(b) 5歳児

事例3 「どんぐりを使った遊びを通して」 **資料3**

(ウ) まとめと今後の課題

a まとめ

幼児が生き生きと生活する中で、豊かな心を育み成長していくためには、園具や遊具という物的環境はもちろんのこと、人的環境である教師の影響が大きいことを痛感した。そこで、いかに教師の関わりが重要であるかについて、事例を通して考えてみた。

○事例1の幼児の育ちから分かるように、幼児の様子を温かく見守り、援助の手を差し伸べる教師のタイミングが指導のポイントである。それを見誤ると幼児は生き生きと遊ぶことができず、発達も見られないのではないかと。幼児が今、何を考えているのか、どんな気持ちなのか、その場の状況を捉え、把握し、心を察して関わっていくことが大切である。

○事例2に示すように、幼児は、用具の取り合い等でケンカを起こすことがある。幼児期のケンカは、自発性が順調に発達している子供同士の自己主張のぶつかり合いであるので、教師は表面だけの姿を捉えるのではなく、何が問題なのかを探り、トラブルへ対応することが必要である。

○教師が、単に良し悪しの判断をしたり、教えたりするのではなく、幼児の心を受け止めることによって、幼児の情緒が安定し、他のことにも目を向けるようになり、遊びも豊かになる。

○幼児は、家族や教師に見守られ、温かく接してもらうことで、心が安定し、他人を思いやる優しい心が育つ。

○事例3に見られるように、友達と喜びや悲しみを共感し、生き生きと遊ぶためには、一人一人の幼児が存在感をもって安心して過ごせる居場所が必要である。そのためには、日々の保育の中で幼児のあるがままの姿や思いを受け止め、一人一人の良さや長所を認めていくことが大切である。

○幼児の発想や主体的な遊びを受け止め、教師も共に遊ぶことで、その活動が発展し、幼児同士の関わりもより一層深まる。

b 課題

一人一人の幼児が、生き生きと園生活を過ごし、心身の正常な発達ができるようにすることが必要である。そのためには、教師が前述のような教師の関わり方を心に留めて指導にあたると同時に、幼児と共に遊ぶ中で、幼児の興味や欲求に応じた新たな環境を幼児と共に作り出し、遊びを通していろいろな体験を積み重ねていくことが大切である。

また、教師が心の窓を開き幼児に優しく接すると共に、幼児の目線で物を見、教師の考えを押しつけることなく遊びを見守り、幼児の自主性や思いやりを豊かにする保育に心がけて、指導に当たっていくことが大切である。

イ 研究委嘱（平成11年度上尾市教育委員会）

（ア）研究主題

感性豊かな幼児を育てるための教育メディアの活用

（イ）研究の概要

a 主題の設定の理由

今、幼児の置かれている社会は、物であふれており、テレビのキャラクター商品をはじめ、テレビゲームやおもちゃなど、欲しいものはいつでも手にすることができる。そのため、心は満たされていると想像する一方で、子供達の心は渴いていると言われており、はじめは低年齢化している。人の気持ちを思いやる心が欠落し、生命の尊厳の念を喪失しているとともに、自己抑止力が欠如しているのではないかと思われる。

このような社会状況の中で、情緒や社会性の要素が確立する幼児期からの心の教育が重視されている。幼児期は、人間形成のために有効な体験をため込む時期であり、将来人間としての大木に育つためのたくましい「根」、すなわち、人として生き抜くためのたくましい体と、精神力を養うかけがえのない時期である。この大切な時期に、教師や友達と一緒に遊ぶ中で、ワクワク、ドキドキと心を躍らせる、驚く、感動する、未知の世界に出会い、不思議さを感じる、知識を広めるなどの体験を多くすることが幼児の心の成長を助長するのではないかと考えた。

さらに、人や動物に対する思いやり、優しさ、美しいものに感動する心、生きる意欲や喜びなど心の豊かさを大切にすることは、感性を育てることである。そのためには、幼児の内面の世界を豊かにする絵本や紙芝居、人形劇をはじめ、音楽鑑賞などの視聴覚教材や放送教育の活用が、幼児の心情を育てるとともに、自分の思いを素直に表現できる幼児の育成につながると考えた。そこで、本主題を設定し、教育メディアの活用を通してより多くの感動体験を重ね、教師の関わりや教育環境と幼児の心の育ちについて研究を進めることにした。

b 研究主題の捉え方

幼稚園では、人間として生きる力の基礎となる力をつけ、自己を形成し、豊かな感性や共に生きる喜びを感じながら、社会の変化に自ら対応できる、心豊かな人間の育成を図ることが大切であると言われてしている。そこで、友達や教師との生活を通して、人と関わることの楽しさや大切さを知り、主体性と社会的な態度を身に付けさせていくことが重要である。その中で、遊びや生活をより豊かにするために、放送教育や視聴覚教材を生かし、幼児の感性を培うことにした。

（a）感性について

感性とは、「外界からの刺激に応じて感覚、知覚を生じる感覚器官の感受性」「対象からの印象を受け取る力」「ものの本質やそのもののよさ、美しさなどを深く感じ取る能力」「美しさや快さ、神秘、人情、愛情など価値や意味を感じ取る心の感受性」などと国語辞典に書かれている。そこで本園では、難しく捉え過ぎず、「感じる心」「何かの刺激を受け、表出しようとする態度」と捉えることにした。

好奇心や探究心の旺盛な幼児期には、毎日の生活の中でいろいろなことに感動すると思われる。そこで、幼児の感動を見落とさないようにし、幼児の発言や行動を大切にしたい。そして、日常生活の中で放送や絵本、お話などの視聴覚教材を積極的に利用し、幼児の心を揺さぶる豊かな感情体験になるよう努めることが幼児の感性を育てることであると考えた。

(b) 教育メディアについて

社会の変化に伴い、幼児を取り巻く環境は、テレビやビデオ、パソコン、テープレコーダー、CDラジカセなどの機器をはじめ、絵本や童話、人形劇などの放送教育や視聴覚教材であふれており、幼児は其中で刺激を受けながら生活をしている。

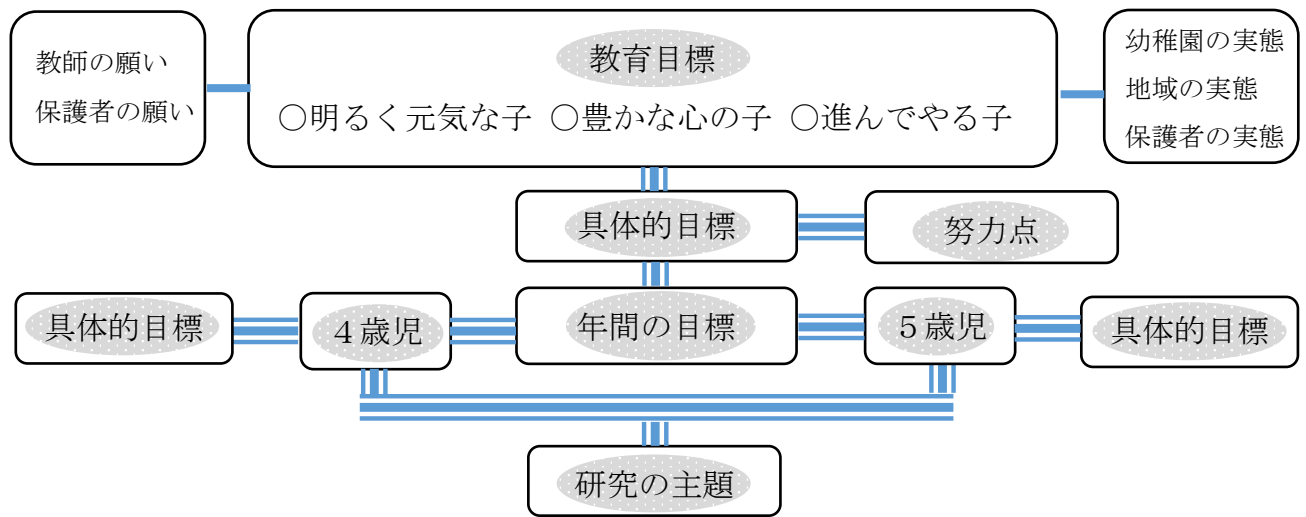
本園では、テレビやラジオ、ビデオ、ダイレクトプロジェクター、カセットデッキなどの機器や絵本、紙芝居、ペープサート、パネルシアターなどの視聴覚教材を使って、物語の読み聞かせをしたり、音楽を聞いたり、身体を動かして遊んだりしている。また、幼児の姿をビデオカメラで録画し、友達や保護者と一緒に見たりしている。そこで、幼児に豊かな感性が育まれるような、さらに効果的な教育メディアの活用方法を探り、工夫することが重要であると考えた。

(c) 放送教育や視聴覚教材の効果について

○幼児の内面の世界を豊かにする有効な体験をさせる。

- ・心を揺さぶる感動体験ができ、情操を豊かにする。
- ・幼児の感性を刺激し、多面的で豊かな感情を盛り上げ、表現意欲をかき立てる。
- ・未知の事象に興味をもったり、再確認し明確に把握したり、知識を豊かにしたりすることができる。
- ・実際に見てみたい、やってみたいという、幼児の興味や関心を高めることができる。
- ・幼稚園での視聴は、共感してくれる教師がいることで、一人では得られない充実感がある。
- ・紙芝居は、幼児の表情などによって、疑問や驚きを捉えることができる。また、ひとこまひとこま幼児の状態によって展開できるので、幼児同士の共通の話題や観るものと演じる者との交流ができる。
- ・お話は、幼児の感性を刺激し、夢を育てるとともに、物の見方、考え方、生き方を形成するための力を蓄えることができる。
- ・絵本や童話は、想像力を育てるとともに、語彙が豊富になり理解する力や話す力、聞く態度などの能力を養うことができる。
- ・友達と一緒に童話を聞くことによって、社会的な態度の芽生えが養われ、教師や友達との人間関係を深め、豊かな人間形成の基礎を培うことができる。

c 研究の全体構想



研究の観点

- 放送教育や視聴覚教材を効果的に活かした保育を進め、幼児の感性を豊かにする環境の工夫を考える。
- 幼児の心を揺さぶる環境の工夫を図り、幼児の思いを受け止め、一人一人の幼児が満足し、充実感が味わえる援助や助言をする。
- 教師が豊かに感じる心をもって、柔軟な対応ができるように努力する。
- 教師自身が視聴を楽しみ、一人一人の幼児の表情を見ながら、ほほえんだり、うなずいたりし、幼児の中に溶け込む。
- 幼児が何に心を動かしたか、何を表したいのか、幼児の心を読み取り、一人一人の幼児の発達に応じた援助や指導の工夫を図る。
- 幼児の欲求や行動と教師の願いの両面から、環境をどのように工夫したらよいか考える。
- 幼児一人一人の感動を引き出せる自然や放送教育、視聴覚教材からの刺激を受け、のびのびと生活できる環境を整える。
- 幼児が自己を発揮し、十分に遊びに取り組める時間と場、用具や素材を考える。

研究の内容

- 研究主題の共通理解を行う。
- 幼児の興味や関心は何か。幼児の遊ぶ姿を捉え、実態を把握し、幼児理解を図る。
- 身近な自然環境や放送教育、視聴覚教材に教師自身が興味をもち、探究する。
- 豊かな情操を育てる環境や教材、教具の工夫と、放送教育や視聴覚教材の利用を考え、幼児の感性を育てる。
- 保育実践を通して、環境の工夫や援助のあり方、幼児の表現や幼児同士の関わりと遊びの展開について考え、指導の工夫と改善を図る。
- 日々の生活の中で、一人一人の幼児がどう育ったか、個と集団の育ちを見極め、反省評価をし、保育の見直しをする。
- 幼児の遊びの姿と育ちを分析し、教育課程及び年間指導計画の修正をする。

d 具体的な取組

(a) 4歳児

事例1 テレビ視聴 “こどもにんぎょう劇場「きかんしゃやえもん①②」” 資料4

事例2 ビデオ視聴 “いきもの図鑑「あげはちょう」” 資料5

(b) 5歳児

事例3 ビデオ視聴 “しぜんとあそぼ「にわとり」” 資料6

事例4 紙芝居視聴 “ディズニー名作劇場「力持ちのポール」” 資料7

(ウ) まとめと今後の課題

a まとめ

- 幼児の感性を豊かにするには、日々の生活をどのように工夫したらよいか、放送教育や視聴覚教材などを幼児の生活の流れの中で、遊びに取り入れていくにはどうしたらよいか、幼児の実態を踏まえ、研究を進めてきた。その結果、幼児の行動をよりよく観察するようになり、心の動きを読み取ろうと心がけるようになった。
- 幼児が同じ時間に同じ空間を利用して遊んだり、同じ番組や絵本を見たり、同じ話を聞いたりすることで、先生や友達に自分の思いを伝えたいという気持ちが起こる。先生や友達に聞いて欲しいと思うのは、どの幼児も同じであり、そこから話合いが生まれる。その中で、自分と違うことを言っている友達がいることに気付き、それを認めないと会話が成り立たないことを知る。そこで、自分の意見ばかり主張せず、友達の言葉に耳を傾け、人の意見を聞こうとしたり、自分と考えの違う友達を認めようとする気持ちが起き、友達を理解するきっかけとなったりする。このようなことから、人と関わる力や自分をコントロールする力が育つと思われる。
- 美しいものを美しいと感じ、人の気持ちを察する心は、日常生活の中で自然や人や社会と直接関わる中で育つ場合と、例えば、「アゲハチョウが羽を広げてゆっくりと優雅に飛ぶ姿や、赤い実やきれいに紅葉した葉を見付けて喜ぶ様子」などの絵本を見たり、放送を視聴したりする中で、間接的に得る場合がある。事例からも分かるように、「NHKこどもにんぎょう劇場」や「しぜんとあそぼ」の番組、「お話でてこい」などの視聴を通して、幼児の発言が活発になったことがうかがえる。
- 映像を見ることによって、自然を見る目や動植物と関わる態度が変容した。例えば、ラジオの「お話でてこい」を聞き、幼児なりにイメージの世界を描いたり、怖い場面では、体をすくめたり、教師に寄り添ったりする様子などが見られた。このような幼児の姿から、テレビやビデオの視聴が、幼児にとって心の成長を促すために大切であり、必要不可欠であると痛感した。今後も、よい映像と音響で視聴させたい。
- 放送教育や視聴覚教材などの環境から、日常生活の中で雲や風などの事象に関する幼児の感性も育ってきている。例えば、うろこ雲を見て「先生見て!」「海みたいだね」と、空を指して教師に語りかけたり、ぽっかり3個連なっている雲を見た幼児が、「団子三兄弟みたい」と言ってみんなで笑ったり、「くじらに似ているよ」「ぞうに似ている」などと、雲を見て思い思いの発言をしたりしていた。教師の幼児に関わる姿が幼児の感性を育てる重要な要素であるため、教師は、それぞれの幼児の思いを受け止め、一人一人が満足するような対応することを心がけることが大切である。
- 研究を進める中で、教師が自然物や事象などの変化や美しいものに気付くことで、幼児もまた、気付いていくことができ、自然に感性が育っていく。教師は心にゆとりをもち、草花や生きものをかわいがり、誰にでも温かく接し、心の優しい教師であることが望ま

れる。一人一人の幼児に愛情をもって接し、いろいろな感動体験ができる環境の工夫を図ることが幼児の感性を豊かにし、友達との関わりや遊びを広げていくことが分かった。

○季節が秋に変わり、園庭の木々が少しずつ色づき始めた頃、保育室ではドングリやカラスウリなどを集め、壁面の木を夏の緑から紅葉に変えた。それを見た幼児は、「わぁ！秋みたい」と感動し、秋の歌を歌い始めた。すると、他の幼児も一緒に歌い、クラス全員で合唱が始まった。このように保育室の環境や園庭など、幼児を取り巻く環境が、幼児の心を育てていくことを痛感した。

b 課題

幼稚園や家庭でお話を聞かせていることから、幼児の語彙数が増え、静かにお話を聞こうとする態度も育ってきているが、中には絵本や物語を読んで聞かせない家庭もあり、自分で読める簡単な絵本を借りていく幼児もいる。そのような幼児は、家庭での刺激が少なく、無感動である。そこで、今後は保護者に対して、今まで以上に、幼児期の感動体験が大切であり、この時期に感性を豊かにする経験を多くもつように協力を呼びかける必要がある。そして、意欲的に遊べる幼児を育てるとともに、教師自身が保育を楽しんでいけるように心がけたい。

現在、高度情報化社会に伴いパソコン等のメディアが普及してきている。これからの子供たちは、多様な視聴覚機器を活用する力が必要になってくると考える。そこで、私たち教師も新しい情報技術を学び、情報を正しく読み取り、誤った情報に惑わされず、取捨選択し、生活に活かしながら、自分を表現する能力を幼児期から育てていけるようにすることが重要である。

ウ 研究委嘱（平成12・13年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）

(ア) 研究主題

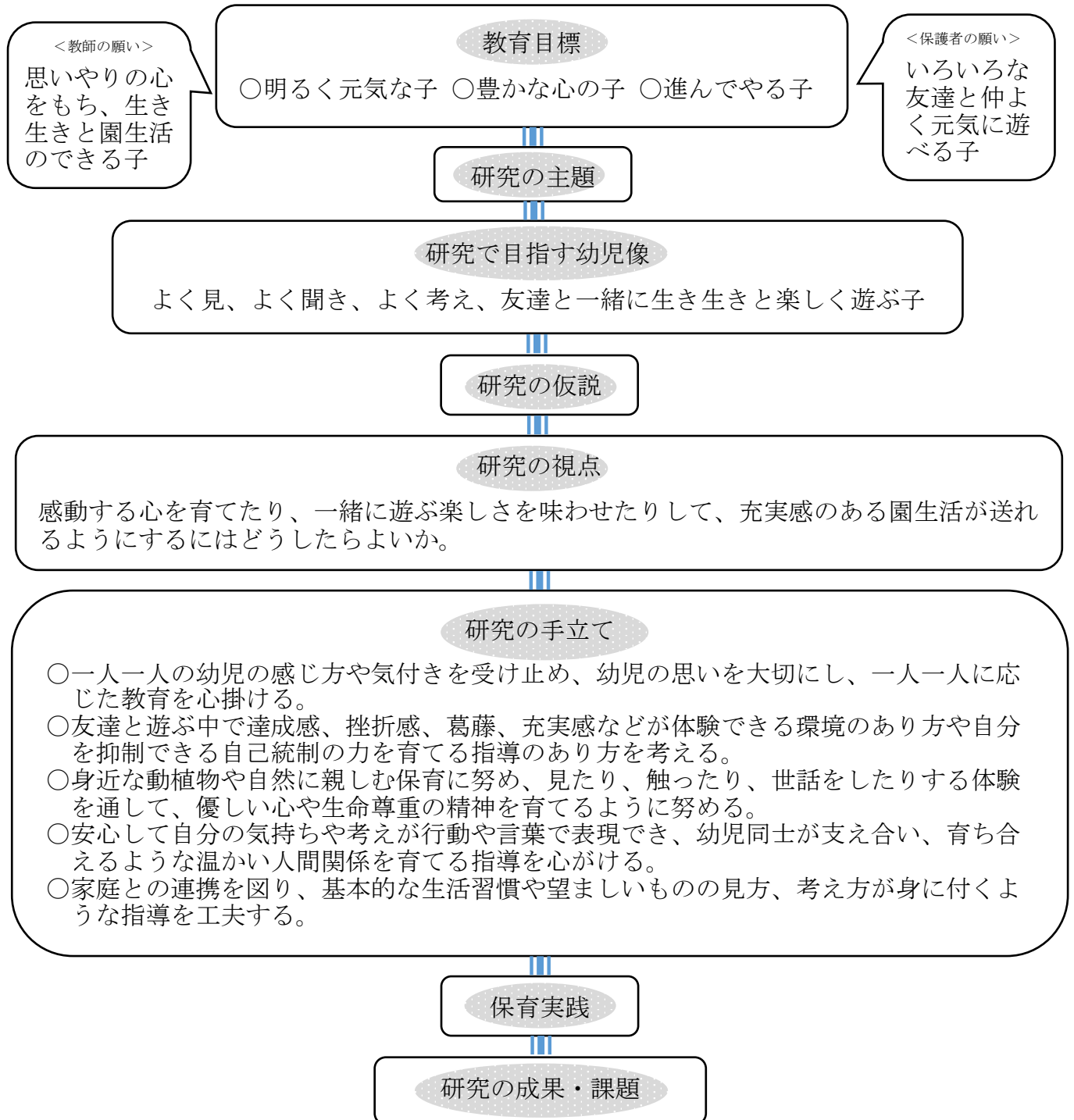
豊かな心を育む環境を考える ～幼児期の道德性の芽生えを踏まえて～

(イ) 研究の概要

a 研究の仮説

いろいろな遊びを通して、様々な体験ができる環境の構成や教師の援助により、幼児が十分に自己を発揮し、のびのびと生活したり、友達や自然と関わったりして遊ぶことができ、心身ともに健康で思いやりのある子を育てることができる。

b 研究の全体構想



c 具体的な取組

(a) 4歳児

- 事例1 4月～6月 「みんなでお片付け！」 資料8
事例2 5月中旬 「どうして仲間に入れてあげないの?『S子ちゃんはだめ!』」 資料9
事例3 6月中旬 「言葉で伝えて！」 資料10
事例4 10月中旬 「友達と一緒に楽しいな『忍者の修行ごっこ』」 資料11
事例5 11月頃 「ルールを守ろう」 資料12
事例6 2月頃～5歳児6月頃 「ルールを変えると楽しいね！」 資料13

(b) 5歳児

- 事例7 6月下旬 「友達と一緒に作ろう」 資料14
事例8 7月 「いっぱいとれたよ！」 資料15

(ウ) 成果と課題

a 成果

- 生活経験の異なる幼児が、一人一人の特性に応じた発達を成し遂げていくためには、教師の役割や環境の構成が大切である。発達に必要な体験を主体的に重ねていくことができる教師の援助や、幼児が自ら学ぶことができる環境構成に努める必要がある。
- 幼児は、集団の中で友達と関わることでトラブルも起こすが、トラブルを通して自分と違う考えのあることに気付いたり、自己主張したりしながら相手を意識した生活ができるようになる。こうした中で友達の真似をしたり、認め合ったりする心の成長が見られる。
- 教師は、幼児と共に生活する中で、幼児同士の遊びの様子を見守ったり、時には率先して遊びに加わったり、幼児が何を楽しんでいるのかをよく見たりして、遊びが発展するような環境の構成や援助をすることで、教育的に価値のある活動につながる。
- 幼児の遊びから、何が育っているか、何を育てたいのかを常に念頭において保育を心がけることにより、幼児にかける言葉や手助け、環境の構成などが的確にできることから、保育の評価反省と、一人一人の幼児の育ちを日々見つめることが大切である。
- 教師が、幼児の遊びを豊かにするようきめ細かな環境を整えることで、幼児の遊びは活発になり、そこで遊ぶ友達と関わる心も育つことから、幼児の発達にふさわしい経験ができるような環境の構成に努めることが大切である。
- 身近な自然や動植物との関わりは、継続して行うことで変化に気付いたり、扱いに慣れたり、感動の喜びを味わったりすることができる。このような経験を通して、幼児期に育てたい感性や様々な心の育ちが見られる。

b 課題

- 一人一人の育ちのみならず、集団の育ちも考え、幼児が満足できる関わりをもつとともに、きめ細やかな気配りのある指導に心がけ、充実した園生活が過ごせる環境の構成と援助の工夫を図る必要がある。
- 幼児期の教育は、家庭との連携が必要であることから、信頼関係を築き、安定した生活環境の中でよりよい成長ができるように努力する必要がある。
- 保育所や小学校との連携を一層密にし、中学生や地域の高齢者などとのふれあいの機会を積極的に設けていく。

エ 研究委嘱（平成18・19年度埼玉県教育委員会・上尾市教育委員会）
幼稚園・保育所と小学校の連携推進事業

（ア）研究主題

幼・保・小連携による心豊かに生きる子どもの育成

（イ）研究の概要

a 連携推進上のねらい

幼児期から児童期への滑らかな接続を図るため、幼稚園・保育所と小学校の滑らかな接続の在り方、子供・教職員・保護者の連携や交流の在り方について研究する。

b 全体構想

研究主題「幼・保・小連携による心豊かに生きる子どもの育成」の豊かな心の捉え方

相手に対して or 自分に対して

- ・かわいいな、愛くるしいな、うれしいな、楽しいな、上手だな、優しいな、親切だな、頼もしいな、待ち遠しいな等と感じる心
- ・役に立っている、初めての人に声をかけられる等、満足し自信をもてる心
- ・主体的で前向きな心

接続の視点と目指す子ども像

ア 学びの接続

教育課程の接続（伝え合う力を視点に）による学力・学ぶ意欲の向上

<目指す子供像>

- ・相手を受け入れ、相手の話を考えながら聞ける子供たち
- ・相手の立場に立って自分の考えや思いを話せる子供たち

イ 育ちの接続

異年齢交流（行事や教科等の交流体験）によるコミュニケーションを通じた豊かな心の育成

<目指す子供像>

- ・気付く・考える・判断できる子供たち
- ・相手を思いやる心をもった子供たち
- ・コミュニケーションがとれる子供たち

研究の手立て

- 幼・保・小の指導内容や接続の明確化
- 幼保小の子供達の交流活動や授業体験などの計画・実践・評価・反省
- 教職員の交換体験研修
- 保護者、地域との連携を図った行事交流
- 幼・保・小保護者および職員アンケートの実施

研究の成果・課題

c 具体的な取組

- (a) 子供たちに「伝える力」「聞く力」を日常生活でつける。
- (b) 知徳体のバランスをとれた子供を目指した指導の明確化。資料16
- (c) 幼稚園教育要領・保育所指針と小学校学習指導要領との接続の明確化。資料17
- (d) 5歳児における小学校教科に関する指導内容と小学校入門期における指導内容の明確化。資料18
- (e) 年間を通した幼保小交流活動計画・実践・評価・反省。資料19
- (f) 保護者・教職員等にアンケート実施。資料20

(ウ) 成果と課題 (【幼】…平方幼稚園 【小】…平方小)

a 成果

- ①伝え合う力(「話すこと」「聞くこと」)に視点をおいた学力、学ぶ意欲の向上について
 - 幼児は、小学生や小学校教師、地域の人々などたくさんの人と交流したことで、人と関わることの楽しさや優しく受け入れてもらう嬉しさを経験し、相手の話に興味をもって聞こうとしたり、自分の思っていることを友達の前で伝えようとしたりすることができるようになった。また、そのことから、グループで一つの目的に向かって遊ぶ過程で相手の思いを受け入れたり、自分の考えを相手に伝えたりしながら進めることができるようになった。【幼】
 - 自己中心的な発言から、相手の意見を考えた上での発言ができるようになってきた。【小】
 - グループ内の話し合いができるようになった。個人差はあるが、人の話を聞き、自分の意見や感想が言えるようになってきている。【小】
- ②異年齢交流によるコミュニケーションを通した豊かな心の育成について
 - ペアやグループ活動が有効だった。一度名前を覚えた子に対して、特に愛着や親しみを感じていた。【幼】
 - 幼児たちは、小学生の読み聞かせをよく聞いていた。読み方について、声の大きさや本のクイズの内容など、困っている思いを小学生に伝えていた。小学生は、幼児に合う絵本を考え、読みの練習に一生懸命取り組んでいた。幼児の思いを聞いて、読む声の大きさ、速さ、クイズの内容、プレゼントなど工夫していた。【幼】
 - 幼児は、小学生に憧れの気持ちをもったり、小学校入学への心構えをしたりすることができた。【幼】
 - 幼児は、いろいろな学年の児童と交流し、活動を一緒にしたとき、優しく接してもらったり、言葉をかけてもらったりしたことで、親近感や感謝する気持ちが芽生えた。また、自分が優しくされた経験から、年少児にも同じようにしてあげている姿が見られ、思いやりの心が育っていると感じた。【幼】
 - 言葉かけ(どんなことを言えば、喜んでもらえるか)の仕方が分かってきて、気遣いができるようになり、言葉や態度に思いやりが見られるようになった。【小】
 - 幼児に対する心遣いが自分たちでできるようになってきている。自然な形で、お互いに手助けし合う姿も見られた。【小】
 - 目線を合わせて話すことや手をつなぐなどの直接的な交流を通して優しさや思いやりの心が自然に芽生えた。【小】
 - 「いらいらしない」「待ってあげる」「できたら褒めてあげる」「いたわってあげる」など、交流の留意点を子供なりに考えていた。【小】

○親しみをもって積極的に声をかけたり、感謝の心をもったりすることができた。【小】

○年長者として振る舞い、自信や自己肯定感を深めることができた。【小】

③教師の交換体験研修や合同研修会を通して

○合同研修会や交流活動の打ち合わせなどで顔を合わせる機会や一緒に活動することが多くなり、お互いが顔見知りになって、教員同士が親しくなれた。

○お互いの違う立場や教育を理解し、尊重して話し合うことができた。

○保育所や幼稚園の子供たちの生活の様子が分かり、実態を理解することができた。

○保育所、幼稚園共に、子供の成長に大切な直接体験が豊かで素晴らしいと感じた。

○保育所や幼稚園の先生や幼児と接することで、発達段階に応じた指導の必要性を改めて実感できた。

○いろいろな視点で段差が見えてきた。

○授業体験を通して、初めて気付いたことや感じたことを話し合ったり、幼児や児童のそれぞれの発達や育ちについて話し合ったりする機会をもつことができ、幼児期から児童期への発達の理解が深まった。

b 課題

①伝え合う力（「話すこと」「聞くこと」）に視点をおいた学力、学ぶ意欲の向上について

○幼稚園・保育所においては、たくさんの体験や遊びを通して生活を充実させ、感じたり気付いたり考えたりしていく。そして、そのことが基盤になって自分の経験を言葉で表現するようになるので、幼児の学び合いや話合いの場を大切にし、援助していくことが伝え合う力につながっていくであろう。【幼】

○「話すこと」「聞くこと」の場合、学力の向上や達成度が見えづらい。【小】

○とっさの時の受け答えがまだまだ困難である。【小】

②異年齢交流によるコミュニケーションを通じた豊かな心の育成について

○幼児が普段接することの少ない人たちと交流することはとても有意義なことであるため、経験をさせてあげたいと思うが、その計画を入れることによって幼児の生活や遊びの流れが中断してしまうこともあるので十分話合いをしてお互いの理解を図る必要がある。【幼】

○高学年は一回程度の交流で、機会が少なかった。毎年、継続していくことで、経験を積み重ね、豊かな心の育成につなげたい。【小】

③教師の交換体験研修や合同研修会を通して

○幼・保・小の指導内容の接続について、明確にしてきたので、特に、入学前にできている生活習慣やマナーなど、小学校生活につなげたい。

○幼稚園・保育所において育てなければならないことは小学校においても共通していることが改めて分かった。また、幼児期の教育が土台となって小学校へつなげていかなければならないと感じた。そのためには、意図的に教育課程に位置付け、継続していくことが大切である。

○幼稚園・保育所での交換体験の際、事前に小学校の先生方にその日のねらい、幼児の発達の姿、幼児への関わり方などの説明や話合いを十分してから保育に入ってもらおうと戸惑うことがなかったのではないかと感じた。

オ 平成24年度親支援モデル施設育成事業（埼玉県指定）

(ア) 研究主題

幼稚園における親の養育力向上をめざして～親の学びを通して園と家庭の絆を深める～

(イ) 研究の概要

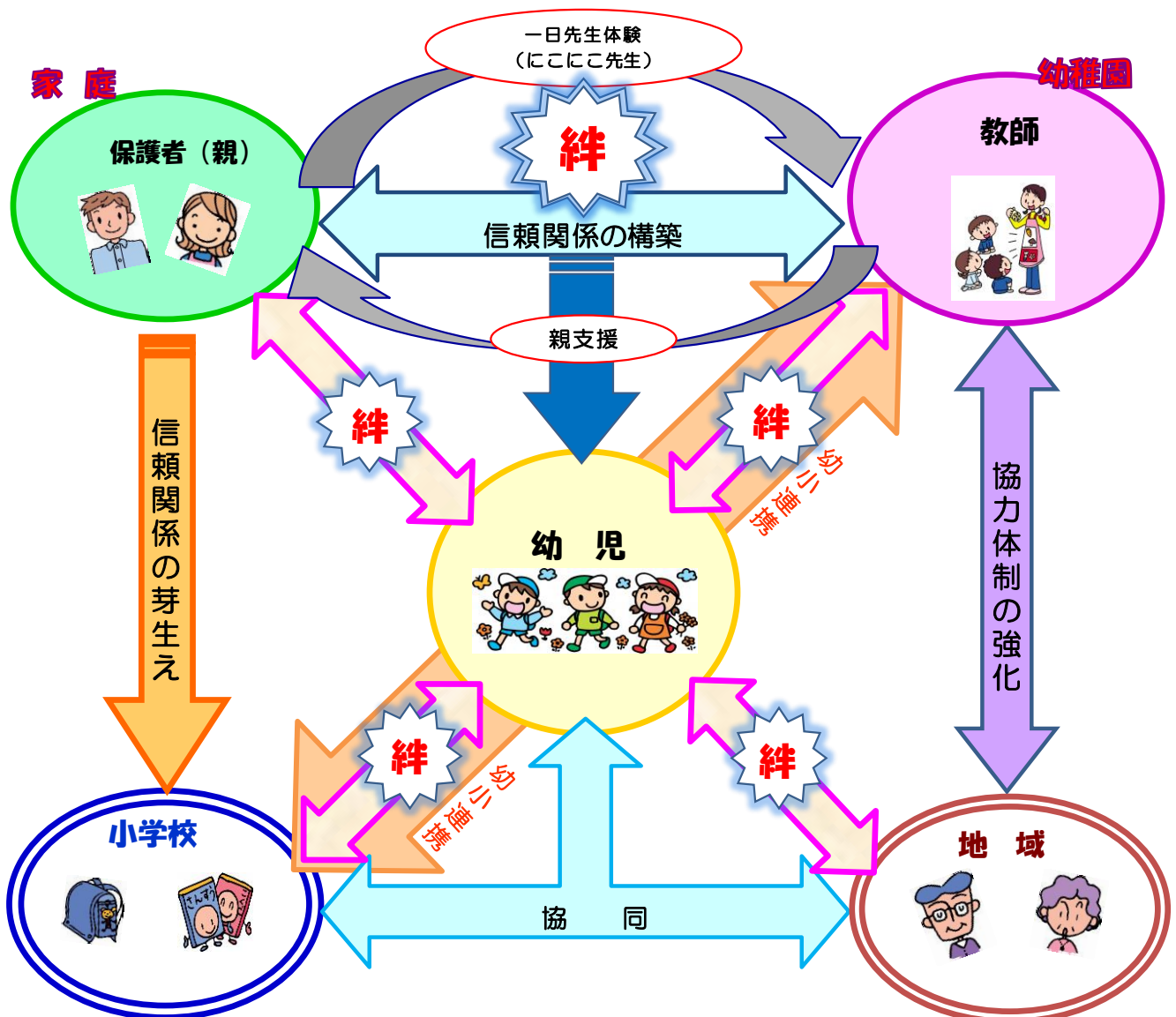
a 研究の仮説

【仮説1】保護者（親）が、園の「一日先生」として、登園から降園までの一日を園児とともに過ごすことで、幼児期の発達の特徴を知ることができ、幼稚園に対しての理解が深まり、信頼関係が構築される。

【仮説2】保護者（親）が、実際にそばで教師の援助やかかわる様子を見たり、多様な幼児と触れ合ったり、遊んだりしながら、親心が育まれていく。

このように幼児を中心にした幼稚園と家庭の共通理解のもとで、両者の間に新たな絆が生まれ、さらには、親と子・教師と幼児の間の絆も深まっていくだろう。そして、幼児を取り巻く幼稚園・家庭・小学校・地域が一体となって幼児を育てていくことで、教育力向上や生きる力の育成につながっていくであろう。

b 全体構想



c 具体的な取組 資料 2 1

(a) にこにこ先生体験（一日先生体験）

(b) 各種園行事への参加や手伝い

(ウ) 保護者の感想

○一日先生体験は初めてのことで楽しみな気持ちと少し不安もあったのですが、子供たちから「先生！」と話しかけてきてくれてとても楽しく過ごすことができました。子供たちと先生の遊ぶ姿を見ていて遊ぶ時は大人も一緒になって楽しむことで子供たちももっと楽しく遊ぶことができるんだなと感じました。今回参加してみて、先生たちの大変さや子供たちのかわいらしさを感じることができ、とてもいい経験になりました。今日は一日お世話になり、ありがとうございました。

○まず、楽しかったです！動物づくりでトラ班は看板作りと餌作りに何となく分かれていたけれど、なかなか餌作りが進まず、先生に相談したら「こうしたい」「ああしたい」とアイデアが出て「さすが先生！」と思いました。また一緒に作っていた普段からおとなしい〇〇ちゃんがたくさん話しかけてくれて嬉しかったです。改めて先生方のおとなしい〇〇ちゃんへの接し方が分かりました。毎日毎日大変だと思いますがこれからもお願いします。

○一日の活動として年長組合同の動物園ごっこの製作でしたが、考えを出し合っている姿、一つの作業を黙々とこなしていく姿など普段では見られない真剣な顔をした子供たちを見て、5、6歳児の成長がとても大きなものと感じられました。一日を通して子供たちの笑顔と真剣に取り組む姿が印象的でした。また、今日の経験から普段の生活での我が子との向き合い方が変わってきました。このような機会を与えてくださりありがとうございました。とても楽しく育児の参考にもなりました。

(エ) 成果と課題

a 成果

○保護者が、主体的に保育に参加することで、子供たちの育ちを直に感じ取ったり、「〇〇先生！」と幼児から慕われ、保育する喜びを感じたりしたこと、教師と親が園の教育について共有することができた。

○保護者は、教師が幼児と生活する姿を見たり、けんかの仲裁や遊びを進めていく様子を見たりして、自分の子供に対しての関わり方や見方に変化が見られ、教師と保護者が同じ視点で幼児を育てていく手立てとなり、信頼関係がさらに深まった。

○保護者が、教師の補助として保育に参加する中で、得意なことを披露したり、幼児と関わったりしている姿から、両者の距離が縮まり、お互いの理解につながった。

○回を重ねるごとに、幼児も「にこにこ先生」に対して期待して楽しみに待つようになっており、幼児が様々な人と交流するよい機会になった。

b 課題

○幼児や園への一層の理解が図れるように内容をさらに充実させ、継続して取り組む。

○父親の参加を促すために日程や募集方法などを工夫する。

○園の通信などで、取組の様子や感想を載せ、保護者への感謝の意を伝える。

○今後もこの活動を保育園（所）・小学校・地域に発信し、子育ての支援につながるよう、幼児教育の充実を図っていく。

(2) 園内研究

ア 平成27年度 資料22

(ア) 研究主題

発達過程を踏まえた造形教育の在り方 ～様々な表現を楽しむための教師の関わり～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 幼児が「やってみたい」「楽しそう」と思わず表現したくなるような魅力的な環境構成や素材選び、出し方、タイミング等が大切である。また、教師の言葉掛けから表現を楽しんだり、取り巻く環境や活動に興味をもったりするきっかけになることが多々ある。そのため、教師が幼児の心に響くような、そして、イメージが沸くような言葉を選ぶことで、幼児が自然と表現を楽しむ姿につなげることができた。
- 幼児が楽しんで表現するためには、教師が幼児の実態や興味・関心、発達段階に合わせた活動を工夫したり、道具や素材などを選んだりすることが重要である。また、活動一つ一つを切り離して考えるのではなく、年間を通した長期的な計画として、継続的に活動や経験を重ねていけるようにすることが大切であることが分かった。
- 4歳児は、様々な素材に触れながら工夫してつくる方法や表現技法などをたくさん経験し、表現に必要な技術を蓄積することが大切である。その際教師が、幼児と共に楽しみながら活動し、幼児の思いや出来あがった嬉しさや喜びを受け止め、満足感が感じられるようにすることで、幼児は、のびのびと表現する姿へと変容していった。
- 5歳児は、自分なりにイメージし、工夫して楽しむ姿が見られたり、友達と相談しながら表現を楽しんだり、4歳で蓄積した技能や経験を使いながら徐々に表出することができるようになる。その時教師は、今まで経験してきた素材を幼児が自由に使い表現できるようにする環境だけでなく、年齢に合った新しい素材や道具を出し、より豊かに表現できるような環境を考えることが大切であることが分かった。
- 自分なりにイメージする幼児の姿を認め、幼児の要求に応えるように環境を再構成する中で、幼児に戸惑いが見られた時は、イメージを聞きながらイメージの実現に向けて提案することが重要である。
- 教師は、友達の表現や様子に気付かせたり、出来たものを友達と見せ合い、互いに刺激を受ける場や機会を設けたりする援助を通して、幼児が心を動かし、より豊かで新たな表現につなぐことができることが分かった。

b 課題

- 幼児の表現を十分に受け止めようと意識し関わりをもっているものの、教師や一般のイメージに近づけてしまいそうな言葉掛けをしてしまいそうになることもある。固定概念に捕らわれず、また、作品としての出来ではなく幼児が何を表現したいのか、表現の中に詰まっている幼児の思いに寄り添いながら援助や言葉掛けをしていけるようにしたい。
- 日々、幼児が生活や遊びの中で心を動かされるような感動体験や気付きをたくさんできるように、教師が豊かな感性をもって、幼児と共に様々な出来事や事象との出会いを大切にし、喜び、驚き、関わることが重要であり、課題である。それは、これらの体験の積み重ねが、幼児の中のイメージを蓄積させ、豊かにし、幼児が様々な表現を楽しむための第一歩となるからである。

(ア) 研究主題

異年齢とかかわりを深めるための指導計画の工夫

(イ) 成果と課題

a 成果

- 年間を通して、年長児と年少児のペアリングをし、異年齢交流や遊ぶ機会を重ねた。ペアは、固定ではなく、様々なペアで組むことができるように配慮したことにより、2学期後半には、学年を越えて名前を覚え、呼び合ったり、やりとりや一緒に遊んだりする姿が多く見られるようになった。
- 年長児の中には、年下の子との関わりに関心をもたない幼児もいた。しかし、ペアリングをして、交流する機会を設けたことで、接し方を知り、異年齢で関わる楽しさを味わうことができた。
- 異年齢交流をできる範囲で多くもったことが功を奏し、交流する時のみならず、日々の生活や遊びの中で、学年問わず、関わりをもつ姿が多く見られるようになった。年少児との関わりを通して、年長児は、自分から相手のためにできることを考え、行動する姿に変容したり、年少児から頼りにされ、役立つ嬉しさや認められる等の場を経験したことから自己有用感が高まり、自信や自己肯定感につながったりした。一方、年少児は、年長児の遊びに興味をもって進んで仲間に加わり、「年長さんってすごいな」「優しいな」「年長になったらやってみたい」等と年長児への親しみの気持ちや憧れ、尊敬の念をもち、進級の期待や意欲がより高まった。
- これまでは、クラスや同学年での遊びの充実のために、園庭で遊ぶ時間が重ならないようにすることも多かった。しかし、教師間で連携をとり、日々の生活の中で異年齢の関わりができるように意識したり、活動や時間の確保をしたりすることで、教師が新しい遊びを知らせなくても自然と遊びの伝承がなされたり、遊びの幅が広がったりした。さらに、双方にとって様々な人と関わる力や楽しさ、言葉で伝え合う力を育むことができたのはよかった。

b 課題

- 異年齢で一緒に活動する機会を増やすことばかりに目を向け、計画や教師の思いだけが先行してしまうと、年長児は「年下の子をお世話する」ことが負担になったり、年少児は、自分を出せずに楽しめなかったりすることがあった。幼児の実態や育ちを捉えながら、互いにとって今は何が大切なのかを考えながら今後も意識して異年齢の交流を進めることが課題である。
- 2学期後半以降は、いろいろな行事や活動が多くあり、異年齢交流の機会が減ってしまった。そのため、十分に関わって遊んだり、継続して一緒に遊んだりすることができなかった。年度当初に年間を見通した計画を立てて実践を進めることが必要である。
- 継続的に交流を計画し、実践することで、異年齢の関わりが深まっていくきっかけになることが分かった。そして、その時の活動内容を工夫することは大切だが、今後はさらに、自然と異年齢の幼児が集まり、自分達で遊びを進めるための場や環境の構成、教師の関わり方や役割を追究していくことで、互いのより良い成長につながっていくだろう。

(ア) 研究主題

幼児の興味・関心を広げ、充実した生活や遊びの実現を目指して
～「生活」や「食育」を中心とした計画的な継続視聴を通して～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 年間を通して毎日のように絵本や紙芝居の読み聞かせをしている。その中で、どの時期にどのような絵本や紙芝居を選び、読み聞かせることが幼児にとって効果的であるかを改めて考えることができた。
- 4歳児の読み聞かせで何かを伝えたい時には、話が簡潔で、繰り返し同じ言葉が出てきたり、短い文章で一緒に考えたりするものの方が心に響きやすく幼児の印象に残ると感じた。
- 5歳児では、「食育」の視聴覚教材を継続的に取り入れたことにより、幼児の食への興味・関心が高まり、弁当や栽培活動時に、自ら栄養素の話や食に関する会話をする幼児が多く見られた。
- 季節や行事等、その時期ならではの視聴覚教材を取り入れることにより、教師と幼児で、または友達同士で話をしたり、考えたりするきっかけづくりとなった。
- 日々の生活や遊びの中で、幼児がふとした瞬間に、絵本や紙芝居の内容のことを思い出し、お話の世界と実体験をリンクさせている姿を見ることがあった。それだけ、視聴覚教材は幼児に影響を与えていることがよく分かった。
- 幼児の興味・関心を広げる際には、環境構成や教師の援助や言葉掛けの重要性が言われるが、研究を通して、視聴覚教材という視点からも働きかけることができるということが幼児の姿から分かった。
- お話の内容によっては、1度ならず、繰り返し手に取り読み聞かせをしたり、シリーズ化しているものは、継続して読み聞かせをしたりすることで、幼児がよりお話の面白さを感じることができるので、大切にしていきたい。

b 課題

- 教師が「こんな会話が生まれるといいな」「興味をもって欲しいな」等と幼児の育ちをねらい、読み聞かせをした絵本でも、実際に読み聞かせてみると、教師の思いと違う感じ取り方をしてしまうことがある。幼児の実態や気持ち、興味・関心を細かく見取り、捉えながらふさわしい教材を選ぶことが大切である。
- 「計画的な継続視聴」が想像以上に難しい。教師自身も様々な視聴覚教材を自ら読んだり、新しい視聴覚教材を積極的に取り入れたりと、意識を高くもち、追究する姿勢が課題である。教師が豊富な引き出しをもつことで、計画的に取り入れることはもちろんだが、いざという時に幼児にすぐに提供でき、幼児の心を少しでも多く震わせることができるのではないだろうか。
- 絵本や紙芝居は、日常生活に取り入れやすい視聴覚教材であるが、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアター、指人形、ビデオ、DVD等、幼児にとって魅力的な視聴覚教材は他にもたくさんある。これらを、定期的に取り入れることにより、さらに幼児が楽しんでお話の世界に入り、生活や遊びが豊かになっていくのではないか。
- 今年度は、クラスの実態に合ったものを取り入れたが、2年間を見通した計画的な視聴について考えていくことで、さらに幼児の興味・関心が広がる姿や視聴覚教材から

の刺激を受けた幼児の姿や会話等が聞こえてくることが期待できる。

エ 平成30年度 資料25

(ア) 研究主題

健康な心と体を育てる環境や活動の工夫

～心と体を働かせながら、充実感や見通しをもって生活や遊びに取り組む幼児の育成を目指して～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 平成30年度から施行された新幼稚園教育要領と旧幼稚園教育要領を比較すると、「健康」の領域のねらいに「見通しをもって行動する」という文言が新たに加えられている。幼児期の「見通しをもって行動する」とは、どういう幼児の姿なのかを共通理解を図ることを通して、教育要領の内容の理解が深まった。
- 園生活において、基本的な生活習慣を確立することはもちろんだが、幼児が自分でやってみようとする意欲を育て、主体的に活動に関わる中で、今までの経験を基にさらに工夫し、見通しをもって自分たちの生活や遊びをつくりだしていくことが大切であると考えた。そこで、各年齢の発達や実態を踏まえ長期的な視野で、健康の領域で何を育てることが大切なのかをねらいを立て、日々の保育の環境や活動、指導の在り方を考えることができた。
- 幼児は、魅力的に構成された場、自分のことをありのままに受け止めてくれる教師、共感や刺激し合う友達の存在があって、初めて心や体が動かされる。十分な時間の確保の下、思い切り遊び、繰り返し楽しみ、少しずつ遊びが工夫されていく環境の再構成や季節に合った活動の工夫などをしていくことが、幼児の園生活の充実感や満足感につながり、自分たちで生活や遊びを進める姿へと変容することが分かった。
- 幼児が様々な場面で見通しをもって行動するようになるために、4歳児では、集団での生活の仕方が分かり、その必要性を学ぶことが大切である。その際、教師が丁寧に関わることで、幼児は生活に必要なことを一つ一つ獲得し、できるようになると、少しずつ自分から進んでやるような自立心が芽生え、友達の影響も受けながら生活や遊びを進めようとする姿が見られた。
- 5歳児では、生活や遊びに期待感を膨らませるような活動の工夫や教師の言葉掛けで、意欲が高まり、4歳児の経験を基盤に主体的に活動するようになる。活動の中で、幼児は試行錯誤し、経験を獲得し、徐々に友達と協力しながら生活や遊びを進めていく姿へと変容した。時には上手くいかないこともあったり、遊びが停滞したりして葛藤することもあるが、どうしたらいいか自分たちで解決の糸口を見つける経験を繰り返すことで、創造力が培われ、見通しをもって行動ができるようになった。

b 課題

- 教師自身が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、日々の保育と2年間の幼児教育を滑らかにつなげていくことが、幼児が成長するためにとっても重要なことである。教師自身が日々の幼児の実態と成長、課題等を細かく見取り、次の活動や育ちにつなげる指導力と見通す力を磨き続けることが課題である。
- 今年度は、「健康」の領域に焦点を当て、改訂のポイントを押さえ年間指導計画を作成し、評価・反省をしながら研究を深めた。幼児は、遊びや生活の中で総合的に学ん

でいるため、幼児期にふさわしい教育活動を展開するには、「健康」以外にも「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域についても考えていく必要がある。

オ 令和元年度 資料26

(ア) 研究主題

幼児が充実感を味わうための戸外遊びの環境や活動の工夫

(イ) 成果と課題

a 成果

- 戸外にある固定遊具は、常にその場に留まり、移動させたり、固定遊具自体の形を大きく変えたりすることは難しい。しかし、固定遊具に教師が手作りのものを環境としてつけ加えたり、移動することが容易な遊具や道具をつなげたりすることで、幼児にとってとても魅力的な場となり、遊びが盛り上がる姿が見られた。さらに、教師が言わずとも幼児自ら環境に関わりながら遊ぶ姿が見られるようになるためには、幼児の実態や興味、心身の発達を促すための適切な環境の工夫をすることが大切であることが分かった。
- 固定遊具や移動できる遊具や道具を使った環境構成は、常に新しく大胆なものでもなく、幼児が繰り返し挑戦したり、遊んだりできるようなものがよい。幼児がこれらの環境に関わりながら継続して充実感を味わうためには、幼児の欲求に合わせて少しずつ変化させることや小さな工夫が大切である。4歳児は、その環境を見て「おもしろそう」「できるから先生、見てて！」と思えるような環境構成、5歳児は、「少し難しそうだけど、やってみたい」と思えるような環境構成がポイントであることが分かった。
- 戸外での環境構成では、前日からの遊びが継続してできるように、あらかじめ場を作っておくことが大切である。
- 5歳児になって、受け身の遊び方から「もっとこうしたい」「こういうのはどう？」と、アイデアが生まれ、友達同士で遊びの場をつくる姿へ変容するようになるためには、4歳児での経験が大切である。4歳児は、いろいろな遊具や道具に触れて遊ぶことが初めての経験であるため、道具ひとつでもいろいろな遊び方があるということを、教師が遊び方や使い方を知らせたり、やってみせたりすることが大切である。
- 幼児期の鬼ごっこやドッジボールなどは、いきなりルールブック通りに始めると、理解面でも身体能力的にも上手く追いつかず、遊びがつまらないものになってしまう。大切なのは、幼児の発達に合わせながら初めはみんなができるよう簡単なルールにし、幼児にとって分かりやすいように色や道具を使って環境を整えたり、伝えたりすることである。また、さらに別のルールのある遊びがおもしろいと思えるように少しずつルールを増やしたり、複雑な身体の動きができるようにしたりしていくことも必要である。

b 課題

- 固定遊具等は、体を動かして遊ぶための遊具や道具だけではなく、使い方や見立て方によりごっこ遊びの場としても変化する。そのことを踏まえて、魅力ある場づくりの工夫を考えていく。
- 実際に子供が遊んでいる時や必要な時に、瞬時に教師が「こういうのはどうだろうか」「やってみたらおもしろいのではないか」等と、提案したり、魅力ある場を作ったり

できるようになるためには、環境の構成のアイデアや工夫を常に研究・追究していくことが課題である。

- 日本には、四季がある。季節の移り変わりの中で、五感を使って様々な体験をできるようにし、自然も大切な戸外遊びの環境であることを意識して活動の工夫を図ってきたい。

カ 令和2年度 資料27

(ア) 研究主題

協同性を育む保育の在り方

(イ) 成果と課題

a 成果

- 幼児が協同して遊ぶようになるためには、まずは「おもしろそう!」「やってみたい」という自らやってみようとする主体性を育てることが重要である。そのためには、幼児が心を動かされるような環境や活動の工夫、友達との関係をつなぐことが教師として大切な役割であることが分かった。
- 4歳児が、友達と協同して遊ぶようになる第1歩は、友達のしていることに興味や関心をもつことである。そのために、教師は、幼児一人一人が教師との信頼関係を基盤に、安心して自分のやりたい遊びを十分にできるよう、環境構成するとともに、教師を媒介として友達関係を広げていくように関わる大切であることが分かった。また、葛藤体験や友達と一緒に遊ぶ楽しさや嬉しさを繰り返し経験することを通して、徐々に友達と楽しく遊ぶにはどうしたらよいか分かるようになる。
- 5歳児になると、友達とのやりとりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりしながら、遊びを進めていく姿が見られるようになる。その時教師は、互いの思いや考えを共有できるようにしながら目的に向かって実現できるように手を差し伸べ、達成感や満足感、充実感を味わうことができるように関わる大切である。
- 日常生活や遊びの中で、友達との関わりを深めていくためには、幼児一人一人の発達に合わせた教師の的確な関わりが重要になる。例えば、幼児が葛藤している場面では、すぐに解決に導くのではなく見守ったり、励ましたりする。また、幼児が友達にどのように接していいか戸惑う場面では、幼児の思いを汲み取って言葉を補い、相手に自分の言葉で伝えられるようにそっと背中を押してあげるなどである。
- 一人一人が自己を発揮し、協同して遊ぶ姿になるためには、得意なことや個々のもつ長所などを教師がアンテナを張り、幼児を褒めたり、友達に気付かせたりし、互いに認め合う雰囲気づくりをするとよい。
- 各年齢の発達を理解するとともに、その時期に必要な経験ができるように、教師は見通しをもって遊びや活動を計画することが大切であることが分かった。また、幼児一人一人及びクラス全体として協同性の芽生えに焦点をあて、細かく見取り、実態に合わせて適切に援助したり、保育活動を展開したりすることも必要である。

b 課題

- 幼児の興味・関心と欲求に応じた内容とで、教師が「協同性」を育むための意図的な環境構成や保育展開をバランスよく行うことが難しい。教師の思いが強すぎてしまうと、遊びの方向性がずれてしまい、停滞したり、幼児の主体性が損なわれたりすることがあった。常に教師は、幼児が心から活動や友達との関わり楽しんでいるか、関わ

りはどうだったか評価し、反省・改善をしていくことが課題である。

- 友達とのコミュニケーションを苦手とする幼児や発達障害のある幼児などが、友達とのやりとりをする際に必要な手段や感覚を徐々に見つけられるようにすることに加え、周囲の幼児が幼児期から多様性を受け入れながら、人間関係を上手く築くことができるようにするための教師の関わり方や「協同性」を育む保育の在り方について考えていきたい。

キ 令和3年度 資料28

(ア) 研究主題

生活や遊びの中で数量、図形、文字などへの興味・関心、感覚を育むためには

(イ) 成果と課題

a 成果

- 数量や図形、文字などに、日常の生活や遊びの中で幼児が触れる機会がどのくらいあるか改めて着目してみると、想像以上に多くあることに気付いた。そして、教師が意図的な環境づくりや関わりをすることで、より幼児が数量や図形、文字などへの興味・関心、感覚を育むことができるということが分かった。
- 幼児の実態に即して簡単なことから始め、段階を追って、次の経験につなげられるように環境や活動を工夫することが大切である。幼児が「わかった」「できた」と感じることで、さらに興味・関心が高まる姿が見られた。
- 例年、語彙を増やしたり、文字に興味をもったりするきっかけづくりとして、「しりとり」や「言葉集め」等を取り入れてきたが、初めて視覚教材（文字を書いたマグネット）を使い、言葉遊びをした。耳で聞くだけの言葉遊びをした時よりも、視覚教材があることで、幼児がよりイメージを広げながら楽しむ姿や、様々な言葉や文字を知ったり触れたりする機会にもなり、とても効果的であることがよく分かった。また、遊び方の工夫次第で、いろいろな言葉遊びにつなげられるよい教材だと感じた。
- 数量では、数を数えるだけでなく、例えば「多い・少ない」「大きい・小さい」「重い・軽い」「長い・短い」など大きさや重さ、長さ等の様々な概念に触れる経験になるよう意識して幼児に関わるようにした。そのことにより、数量に対する感覚が磨かれ、自分なりに知識を活用している様子も見られるようになった。その経験は、具体的体験として小学校算数の基礎となり、学習の理解につながると考える。
- 形を捉えることが苦手な幼児に対して、三角や四角等を組み合わせると、動物や乗り物に変身する簡単な図形パズルをしたり、マグネットを自由に組み合わせてイメージしたものを作ったりする遊びから始めた。幼児にとって親しみやすく簡単な教材を用意し、形を組み合わせると新たな形が出来上がる面白さを感じられるようにしていくことが大切だと分かった。そして、形が見えるようになってくると、イメージに広がりが見られ、描きたい絵を描けるようになっていたり、折り紙製作でできることが増えたりし、表現の仕方や出来上がる作品、製作時の意欲や取り組み方の姿にも変化が見られた。

b 課題

- 在園児が一人のため、幼児の実態に即した活動の工夫ができた。しかし、今回の指導方法や環境、活動の工夫を集団の中で行った場合は、個人差があり、必ずしも幼児一人一人が文字や数量、図形などへの興味・関心を高め、感覚が育まれた姿につながる

とは限らない。大人数の場合は、友達からの刺激が活動に広がりを生むという良い点を考慮し、集団活動の利点を生かした環境づくりや活動の工夫をすることを大切にしながら、研究を深めていくことが必要である。

- 今年度の研究は、5歳児のみである。4歳児が文字や数量、図形などに興味・関心をもつためにはどんな環境や活動の工夫が必要なのか考えたり、5歳児の前段階として4歳児にどんな経験をし、つなげていくのかを考えたりすることで、より充実した研究になるだろう。さらに、就学を見据え、小学校1、2年生の学習内容について教師が理解を深め、小学校教育へのつながりや見通しをもち、活動を設定していくことも課題である。

9 まとめ

令和3年7月、中央教育審議会教育課程部会において「幼児教育スタートプラン」が策定され、すべての5歳児に、生活・学習の基盤を保障し、小学校教育に円滑に接続することなどが示されました。上尾市教育委員会においても、市内唯一の公立幼稚園として長い歴史をもつ平方幼稚園のこれまでの成果を、市内の幼児教育施設及び小学校へ広く周知し、共有することは、大変意義深く、本市の幼児教育のさらなる充実に資するため、本誌を作成する運びとなりました。

最も古い記録では、平方幼稚園は、昭和49・50年に埼玉県教育委員会の委嘱を受け、研究に取り組んでいます。本誌では、平成8・9年度の上尾市教育委員会委嘱研究のまとめから掲載いたしました。この間、各種教育実践報告発表も含めると、7つの実践に取り組んでおります。（本紙：沿革の概要参照）現在のように全てをデジタル作成、保存する時代ではないこともあり、残念ながら、研究文献を確認することは叶いませんでしたが、平方幼稚園では、常に研究の視点を持ち、着実に教育実践を積み重ねてきたことが分かります。

本誌は、これまでに携わった研究委嘱などの研究概要と成果、課題について改めて取り上げ、まとめ直したものです。詳細については、当時、研究冊子等としてまとめたものをそのままPDF化し、別冊資料という形で紐付けしております。当時の研究をそのまま掲載していることから、時代の変化とともに環境設定や手法等において、現在とは異なっているところはありますが、幼児教育の本質である子供の実態や反応に寄り添った教師のまなざしは、全く変わるところはありません。教育課程を基に、教育的意図をもって活動を設定し、丁寧に子供の姿を見取ることで、活動の効果を検証し、次の活動につなげていく研究の在り方は、まさに現在、重要視されている「カリキュラム・マネジメント」の視点と同様です。また、時代に合った教育課題に向き合うとともに、その時々々の幼稚園教育要領を丁寧に読み解き、目指す子供の姿を明確にしながら研究に取り組む姿勢は、今後も、各幼児教育施設等において大切にすべき事柄です。

さらに、本誌では平方小学校との連携推進事業についても取り上げています。立地的に特に恵まれた環境での取組ですが、参考にすべき点は多く、幼児教育スタートプランでも触れられている「小学校教育に円滑に接続すること」について、先駆けて取り組んだ事例です。幼児教育施設だけでなく、小学校においても、教育及び保育に生かしていただけると考えております。

平方幼稚園57年間の教育実践の歩みは、決して、本誌のみで語れるものではありませんが、その一端を上尾市全域で共有し、上尾市の幼児教育の推進の一助としていただければ幸いです。



上尾市立平方幼稚園 研究の歩み

編集 上尾市教育委員会学校教育部指導課
発行 上尾市教育委員会

令和4年3月 発行